



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学ぶ楽しさを伝える英語多読学習 : 2009年の公開講座から
Author(s)	原田, 真見
Citation	The Northern Review, 39, 1-4
Issue Date	2019-11-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76176
Type	other
File Information	NR39_1_harada.pdf



学ぶ楽しさを伝える英語多読学習：

2009 年の公開講座から

原田 真見

高見敏子先生が北海道大学で 2005 年に始められた英語多読多聴学習の概要や授業での具体的な取り組みについては、外国語教育センター 外国語教育将来構想ワーキンググループ 鈴木志のぶ・辻本篤 編『平成 29 年度 外国語教育における ICT 活用／自律的教育活動の発展』に収録された高見敏子・浜井祐三子「北海道大学における英語多読多聴学習の 12 年の歩み」(2018 年 3 月)に詳しい。本稿では少し視点を変え、高見先生と私が 2009 年に公開講座として行った英語多読学習のセミナーを振り返りながら、普段英語に触れる機会が少ないと思われる人の英語学習全般や英語の学び直しにおける多読(多聴)学習の可能性について紹介したい。なお、高見先生担当回のすべての資料や受講者のアンケート結果を私が把握している訳ではなく、また、実施後 10 年の時間が経過していることもあり、正確な記録となりえないことは最初に断っておかなければならない。それでも、高見先生が熱心に取り組んでこられた多読多聴指導への思いを伝えるひとつの事例として、この機会に振り返っておきたいと思う次第である。

2009 年の当該セミナー「英語圏の児童向け学習図書で学ぶ英語表現」は、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院が毎年一般市民向けに行っている公開講座のひとつとして開催したものである。英語多読学習の楽しさを学外の方にも紹介したいとの高見先生の強い気持ちから実現した。私自身は、高見先生に助言をいただきながら北大の英語演習クラスでの多読指導を始めて数年経ち、少し指導にも慣れ、またこの学習方法の面白さを感じていた頃だった。高見先生と同様に私も北大生向けの授業としては多読学習の効果や意義を実感していたとは言え、大学生に比べ普段英語とあまり縁のない受講者が多くであろう公開講座で多読を扱うというのは、なかなか挑戦的な試みだったが、だからこそこれは多読学習の可能性を考えるよい機会になるのではないかと思い、参加させていただくことにした。

セミナーは全 8 回で、高見先生と私がそれぞれ 4 回ずつ担当した。全体の大きな方針としては、「こんな面白い英語学習法がありますよ」ということを紹介することに主眼を置いて銘々が担当回の講義を組み立てた。また、講義は各回の前半に留め、後半は講義で紹介したシリーズを中心に実際に多読図書を読んでもらう時間とした。公開講座の受講者には、もちろんその年度毎に設定されるテーマに興味を持って来てくださる方もいるが、その一方で、テーマに関わらず毎年出席してくださるいわゆる常連の方もいる。後者のタイプの受講者が、例年とはまったく趣の異なる今回のセミ

ナーに面食らうことも想定されたため、英語に関心のない人にも何かしらの興味を持ってもらえるように、「語学学習」としての多読だけではなく「文化学習」としての多読の側面も紹介するように苦心したつもりである。

すべての回の記録が残っている訳ではないので抜粋となるが、下記のようなテーマを設定した。

- 英語学習における「やさしい本」の活用法
- 絵本で垣間見るイギリスの日常生活
- 地域色豊かなオーストラリアの学習絵本
- 英語で読み直してみる童話

「英語学習における『やさしい本』の活用法」は、高見先生が準備した初回のガイダンス講義である。受講者の英語に対する関心度を確認しながら、多読学習の意義や取り組み方について丁寧な説明を行った。なお、この際の確認により、受講者の7割が英語学習に関心を持っており、特に、趣味や海外旅行の時の手段として英語を勉強している／したいと考えていることが分かった。一方で、残る3割弱は英語学習に特に関心を持っていない受講者であった。講師である私たちはこのデータを念頭に、後の講義を調整していくことになる。高見先生の初回ガイダンスの具体的な内容は、次のようなものであった。

(1) 基本的な多読図書シリーズの紹介

Penguin Readersのような英語学習者向けのスタンダードなもの
英語圏の児童向け図書

(2) 従来型英語学習における「インプットの不足」

アジア各国と日本の英語教科書比較

(3) 多読学習法（「100万語多読」）について

やさしい本を読む効果

挿絵の効果

北大の授業における学生の反応

多読の短所（注意点）

(4) 「やさしい本」の活用法

「読む」「聞く」「書く」「話す」

(5) 北大図書館の利用方法

このセミナーでは、有効な英語学習方法として多読学習を紹介する、というのが大きな目標であったため、(2)で、多読学習をほとんど知らない受講者に対して、従来型の学習法で一番不足しているのが量的なインプットである点をデータを示しながら

説明した上で、(3)(4)において、多読図書の文章から実例を示しながら、「やさしい本」をたくさん読む勉強法の効果を説いた。さらに、関心を持った受講者がすぐに多読に取りかかれるように、(5)において市民が北大図書館を利用するための手続きまで詳しく説明したのは、その人にとって何が必要な情報か、何に困りがちなのか、相手の立場に立って考え丁寧な工夫をする高見先生ならではの配慮であったと言える。ちなみに(3)(4)は、多読学習をまったく知らない人を想定した説明だったが、どのような学習法であっても、まず、その効果や狙いについて十分に理解した上で取り組むことが重要であることは言うまでもない。そのため、この公開講座後、私は北大の多読授業においても、この高見先生の初回ガイダンス資料を活用させていただいている。

初回ガイダンスを踏まえた上で、セミナーの2回目以降は、(1)さまざまな多読図書シリーズを紹介しながら、(2)簡単な英語のフレーズについて勉強し、かつ(3)多読図書を利用して外国文化を学ぶ、といった構成で講義を行った。イギリスの日常生活については、高見先生がイギリスの小学生向けの読み物を紹介しながら、アメリカ英語とイギリス英語の違い、挿絵を見ながら単語の意味を類推する方法、単純な繰り返しや押韻が多く基本表現を覚えやすい子どもの本ならではの長所について説明した。説明の合間に、紹介してきた文章に関する英語チェックの問題が出題されるので、気楽な講義ながらも実は受講者は気を抜けない構成となっている。一方で、作中で展開するエピソードや挿絵を利用しながらイギリスの日常生活についての話も盛り込まれ、「英語学習」以外の面での多読の楽しみ方も提供した。私が担当したオーストラリアの多読図書紹介の回でも、子ども向け図書を読んで基本動詞のおさらいをしつつ、こうした国々で子どもたちに伝えようとしている価値観についてその一端を知ることができるといった話をした。

毎回読書の時間を設け、実際に子ども向けの本を受講者に読んでもらったが、前半で様々な着目ポイントを紹介しておく、普段から多少英語を勉強している人でもいろいろな気づきがあったようである。高見先生は受講者からのフィードバックも大切にしていたため読書後に英語についての質問を積極的に寄せる受講者も多く、それが次の講義や読書の発展につながっていった。こうした受講者からのフィードバックは、北大生向けの授業でも大いに役立ったと言える。北大の授業でも最初の数回はごく易しい本から読ませるようにしているが、それによって「英語の本を簡単にすらすら読む」ことに慣れはしても、「易しすぎるから英語そのものの勉強にはならない」と考える学生もいる。公開講座受講者からのフィードバックを参考に、物足りなさを感じる学生には、本を読みながら「基本動詞や前置詞の使い方のパターンを集める」、「童話ならではの決まり文句を探す」といった課題を付け加えてみたところ、子どもの本ならではの分かりやすくそれでいて多様な表現に目を向けるようになった学生も多い。多読学習はなによりもまず自由に読書を楽しむことが肝心だが、この公開講座での試みのように、多読用図書を読む際の語学面／文化面での様々な着眼点を提示す

ることは、学習者が自分に合った読書の楽しみ方や勉強法を選択し拓げていくことにつながるだろう。

属性の異なる受講者相手の公開講座での多読紹介は難しくはあったが、実験的に様々な試みをすることもできた。それによって私たち自身が改めてこの学習法への理解を深めることができたと思う。

（付記）

高見さんは、いかにも高見さんらしく「忙しいと思うけれど、もしよかったら」と言いながら私をこの公開講座の企画に誘ってくれました。私にとっては、高見さんと打ち合わせをしながらセミナーを進めていくこと自体がとても楽しい作業でした。高見さんも公開講座の企画時から終了時まで、終始存分に楽しんでいました。講座最終日に受講者に修了証を渡す高見さんはいつもに増してニコニコ顔だったのを覚えています。高見さんについて思うこと・語りたいことは尽きませんが、何を思い出してもあの笑顔が目に残り、明るい笑い声が聞こえてきます。